



さかいぎ

チャレンジアップ! かがやく自分

7月号

令和5年6月30日
横浜市立境木小学校
校長 清見克明

よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト

校長 清見克明

6月22日に保土ヶ谷公会堂において、「よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト」保土ヶ谷区大会が行われました。区内の小学校の代表19名が、「国際平和のために、自分がやりたいこと」というテーマのもと、「持続可能な開発目標」(SDGs)に基づき、17の視点をとらえ、それに関連した内容についてスピーチを行いました。境木小学校からは、6年生の廣瀬凌和さんが、参加しました。しっかり堂々と自分の意見を発表することができました。とてもすばらしい発表でした。その発表原稿を紹介いたします。

「一人ひとりができるふだんの備え」

廣瀬凌和

みなさんは、災害対策をしていますか。その対策は万全といえるでしょうか。ぼくは、日々「ふだんの備え」について考えています。

ぼくは、六才のときに家族で熊本県に行きました。一番の楽しみは熊本城を見ることでした。しかし、見られたのは崩れた熊本城でした。二〇一六年の熊本地震直後だったのです。ぼくは、地震のい力の強さと、おそろしさを実感しました。国土交通省によると、世界でマグニチュード六以上の地震の約二割が日本で発生しているそうです。日本は、世界の中でも地震が多い災害大国なのです。その分、日本の災害対策は世界トップレベルだとぼくは思います。地震は、いつ、どこで起きるか分かりません。一人ひとりが考え、しっかりと備えておくことが大切です。ぼくの家では、防災マップでひなん場所を確認しています。地震の震度や被害の状況によって、ひなんする場所がちがうことも確かめました。

さらに、いざというときに対応するためにぼくができることは三つあります。

一つ目は、学校のひなん訓練を真剣に行うことです。「おかしも」に気をつけて本番と同じようにひなん訓練にのぞみます。二つ目は、地震が起きたときに困らないように備ちく品を用意することです。ぼく自身も必要だと思うものを非常用バッグに入れて、いつでも持ち出せるようにしています。三つ目は、地域の防災訓練に参加することです。ひなんしたあと、どんな生活になるのか、ぼくができることは何か知っておくことが必要だと感じました。

ぼくはまだ、大きな地震を経験したことがありません。しかし、「もしも」を想定して備えることが「命を守ること」につながります。ぼくは家族の一員として、そしてこのまちの一員として、もしものときに自分で考え行動できる人でありたいです。そのために、災害に対する知識をしっかりと身につけます。地震が多い国は、日本だけではなく、最近大地震の起きたトルコ、他にも多くの国で自然災害が起きています。この対策や備えが世界中に広がって、災害によって辛い思いをする人が減ってほしいです。

いざというときのために、一人ひとりが防災意識を高くもち、非常時に対応できる力をつけていきましょう。みなさんも、もう一度「ふだんの備え」について見直してみませんか。

1923年に発生した関東大震災から100年となる今年は、マスメディアでも様々な特集が組まれて報道されています。5月には震度5弱以上の地震が日本各地で、6回観測されていました。5日の能登半島沖の地震によって避難生活を余儀なくされている方々が未だに多くいます。11日の千葉県南部地震や26日の千葉県東方沖地震では横浜でも大きな揺れを感じました。改めて「地震に対する備え」の確認をしたいものです。